# 宇野邦一教授を送る

## 前田英樹

今年度いっぱいで、宇野邦一教授が本学を去られることになった。もちろん淋しくはあるが、何か羨ましくもある。宇野さん（ここからは、いつも通りこう呼ばせてもらう）は、書くことをもって生きる理由としてきた人だから、来年からは、いよいよ筆一本で暮らしていかれるのだろう。宇野さんの昔からの読者のひとりとして、そのことをむしろ喜びたい気分である。

しかし、よく考えてみれば、宇野さんという人は、私には何かと羨ましい点の多い人である。この人ほど、自分の天分にふさわしい出会いを、実人生のなかで持ち得た人は少ないだろう。

まず、土方巽との出会いは、決定的なものだったのではないか。このことがなければ、宇野さんは、いささか甘味の勝った青春詩人（それでも立派なものだが）になっていたかもしれない、そんな想いが湧く。たとえば、宇野さんのランボーの読み方は、土方巽の濃く、荒々しい血のなかに流れ込んだ。またその思索の活き活きと回転する中心が、表現する身体や、創造する知覚の主題をはずれることがなかったのも、反芻され、生き直された土方との出会いのせいだろう。

パリでのジル・ドゥルーズとの出会いは、他人の想像を超える幸福な邂逅であったようだ。宇野さんの口から、ドゥルーズという名前が発音されるのを、私は何度聞いたことだろう。そのたびに、その声にこもる深い敬意や親しみや、またその人からの教えを直接に受けたという自信や喜び、そういうものを感じた。ドゥルーズは、日本から学びに来たこの鋭敏な青年に、きっと何か大きな希望を抱いていたに違いない。託したい何かを持っていたに違いない。宇野さんがする思い出話に、私はいつもそれを感じ取っていた。

実際、宇野さんは、ドゥルーズの願うところにずいぶんよく応えたのではないか。宇野邦一の訳業なしに、日本にドゥルーズがこれほど普及したはずもない。また、この容易に説明しがたい、巨大な哲学者について宇野さんが書き下ろした二冊の本

（『ドゥルーズ――流動の哲学』2001年、『ドゥルーズ――群れと結晶』2012年）は、それぞれの姿において実に行き届いたもので、すべての概念が、著者の身を通した熱い言葉によって、ひとつの生き物のように捉え直されている。しかも、ここには、勝手な解釈というものはひとつもない。対象に対する、動じることのない著者の尊敬が、あるいは感謝が、そういうことを微塵も許していない。宇野さんの数ある著書のなかで、やはり代表作に入るものと思う。この二著から恩恵を受ける若い読者は、これからもあとを絶つまい。

宇野さんが、ドゥルーズから学んだ最も大きなものは何だったか、と改めて考えてみる。それが、いろいろな概念や論理の構成でないことは、明らかである。学ばれたものは、ひとりの哲学者に属する何かではなく、限りなく自己増殖し、豊かな土のなかに根を拡げて生き延びていく思考のシェーマのようなものではなかっただろうか。それは、思考というより、そのシェーマであり、シェーマというより、その止むことのない執拗な運動、現働化する力の束だった。こういうものが、いったいほんとうに学びうるのか。宇野さんのドゥルーズ論は、いつもその問いかけを秘めながら書かれていたように思う。

宇野さんは、ドゥルーズから盗み取るように学んだ多数のシェーマの運動を、たとえば「群れの思考」と呼んだ。運動のひとつひとつには、固有名が付されている。スピノザ、ライプニッツ、ニーチェ、アルトー、ベケット、カフカ……宇野さんは、ドゥルーズと共に、こうした名前の間を実に自由に、ほとんど無造作に行き来した。

立教大学に「映像身体学科」という、いささか耳慣れない名称の学科が誕生したいきさつは、もちろん宇野邦一自身が実践したこの「群れの思考」と深く関係している。彼が、この学科を去った後、「群れの思考」と呼ばれる真似しがたいこの実践は、何らかの形で、やはり引き継がれていくのだろうか。当然ながら、私には確たる答えはない。ただ、ほんとうに引き継がれていくとすれば、それは、もはや宇野邦一に対して未知な思考の出現を意味しているに違いない。そういうことでなければ、ならないだろう。

ともあれ、宇野さん、長い間の大学業務、おつかれさま。ほんとうに、おつかれさま。これからは、いよいよ望むとおりの活動を拓いていってください。

**前田英樹**｜まえだひでき
立教大学現代心理学部映像身体学科教授｜映像身体論